

である。その後、羅什・菩提流支・玄奘を経て、最終的に真如が *latitāta* の訳語として確定されることとなった。

それでは即非の論理と、大拙独自の「如」の思想に通底するものとは一体何であろうか。即非の論理は、前半「A即非A」が空観によって事物が空じられた状態、つまり事物の言語化抽象化が否定され突破された状態を表わし、「是名A」の後半が事物が仮有として如々と現成する状態、つまり事物のそのもの性の肯定へと迫らんとする状態を表わしている。これが先の引用における「肯定が否定で、否定が肯定」の意であろう。大拙は「凡て吾等の言葉・観念又は概念といふものは、さういふ風に、否定を媒介にして、始めて肯定に入るのが、本當の物の見方」〔五〇/三八一〕とも述べている。

続いて「如」に関してであるが、大拙は「如」について「シユーニヤター(空)が一切を否定、あるいは拒絶するものとすれば、タタター(如)は、一切を受け入れ、一切をうけがうもの」(鈴木大拙著・工藤澄子訳『禅』一九八七、一七四頁)と述べている。これは、空によって否定され無差別の相の下に置かれた事物が、「如」として再び肯定され、個物的多として差別の相の下に働き出すことである。即非の論理の前半が空の無化作用を表わすことは既述の通りであるが、「如」はまさにその論理全体「A即非A、是名A」を表現している。このようにして事物は、空という否定的契機によって如として肯定される。そしてこの否定と肯定は過程的に実現されるのではなく、空の場が即如である。

以上見てきたように、即非の論理と「如」に通底するものと

は「否定即肯定」の構造である。大拙はしばしばその著述において、仏教の論理化の必要性を説いている。言詮不及の真理を論理化することは困難な課題であるが、即非の論理はその要請に対するひとつの回答であるだろう。片や「如」とは、直観的に看取される事物のあるがままの姿を現成せしめる、空と一体化した見である。実体や概念が否定されたその場が、即そのものの自体の肯定ということである。このように即非の論理と「如」とは、仏教的真理における「否定即肯定」の構造を論理・直観の二方面から言い表したものとと言えるのではないだろうか。

『雜阿毘曇心論』業品における無間業の壊僧について

智谷 公和

『雜阿毘曇心論』(Samyuktābhidharma-hrdaya-sāstra, 大正藏經 No. 1552, 以下『雜心論』と略す)業品(Karma-nirdesa)における無間業の壊僧が説かれている偈と長行は、一七一偈とその長行である。それらの偈と長行は、大正藏經二八卷八九九頁中段一一行から二四行までである。

この偈と長行を取り上げることによって、無間業の壊僧について論述していきたい。論述方法は、『雜心論』と『心論』『心論経』を対比し、玄奘訳『俱舍論』、この漢本に相応するプラダン本の梵文を参照し、梵文『称友疏』等を対比させて、また『順正理論』も参考にしながら、無間業の壊僧について述べていくものである。

『雜心論』の無間業における壊僧が説かれている一七一偈は、「妄語もて僧を破壊するは、諸の業に於いて最悪なり。」これを

一七一偈とその長行を参照して解釈してみれば、「妄語(mr̥ṣā vada)によって僧が教団を破壊するのは、もろもろの業において最も重罪(maha-savadya)である。」とされる。このように妄語によって教団が破壊されるとはどのようなことであるのか。『雑心論』一七一偈の長行によれば、「仏法を重要視せず、正法で広く教え導き転じさせず、大衆を悩ませ乱す。」(法身仏所重。以彼広方便転故。壊僧者悩乱大衆故。)大正二八・八九九・中一六一一七)とされる。『俱舎論』で『雑心論』の相応するのは、業品一〇七偈とその長行(大正二九・九四・中二一一五)である。この漢本に相当するプラダン本の梵文(LAK)は、二六四頁二行以下である。また梵文『称友疏』(萩原本『AKV』)では四三〇頁五行以下である。『俱舎論』漢本と梵本とも『雑心論』と相違しない。又、心論系論書である『心論』と『心論経』も同じく『雑心論』と相違しない。ただ『心論経』には壊僧について二種があるとして『雑心論』に述べられていないことを明かす。その二種とは「仏の教えを壊して別の集団を作る。二つは仏の決めた作法を壊す。」(有二種破僧。謂破法輪及破羯磨。)大正二八・八四三・下一六一一七)とされる。

壊僧の体について『雑心論』一七一偈では述べられていないが、一六六偈に「謂く不和合の性なり。當に知るべし、是れ壊僧なり。」(大正二八・八九八・下一八一三二)と。壊僧の体は不和合の性であるとしている。心論系論書である『心論』『心論経』には述べられていないが、『俱舎論』『順正理論』では『雑心論』と同様に述べられている。

妄語・虚誑語によって教団を破する僧を壊僧と言うのであるが、ここで壊僧が行為する虚誑語について述べてみたい。虚誑語の定義は『長阿含』『衆集経』(大正一・五〇・中)に、「見・聞・覚・知された事実に対して、その通り話すことが聖言であり、事実を枉げて話すことが非聖言(anariya-vahara)である。非聖言こそ虚誑語である。」と。これに解説をしたのが世親と衆賢であった(大正『順正』四二・大正二九・五七九・上)。又その中で虚誑語と業道成就について、「虚誑語を發する者が異想し發言し更に所誑者(相手)が、能解(abhiñā samā-ttha)・その表面上の意味だけを取り、それに動かされて自分の心を誤りなく染心するに至る。その時虚誑語を發言した者が業道を成就する。」と。(大正『俱舎』一六・二九・中、『称友疏』、萩原本『AKV』)では四〇六頁)以上のことから語業である虚誑語の業道成立の条件は三つあると考えられる。一、染心を持つている。二、異想し發言する。三、義を解する。虚誑語を行為する僧の特色は慚愧がないことであろう。慚愧が生じたならば善を生じることも可能であろう。譬喩者は「無間業可転」を主張したとされる。破和合僧のような重大な悪業であっても、可転・転換することが出来るのではなからうか。

無表業の相統問題

日比 佑香

業の問題は、仏教教理の最たる重要課題であり、『阿毘達磨俱舎論』(AKBh.)でも最も重要とされているテーマである。そこには、我々が存在する世界とは、自らが過去に為した業に